

介護役割意識の回答パターンと関連要因

—潜在クラス分析による検討—

中西 泰子
(相模女子大学)

【要旨】

本稿では NFRJ18 データを用いて、介護役割についての 4 つの意識変数に対する回答パターンがどのように類型化できるのかを潜在クラス分析を用いて検討する。夫方・妻方親への介護支援について人々はどのような枠組みから捉えているのか、その類型を把握し、さらに、類型化された回答パターンがどのような属性と関連しているのかという観点から、それぞれの回答パターンの性質について検討する。それらの検討をとおして、若年・壮年男女の世代間関係に対する複数の認識枠組みの存在を提示したい。

介護役割意識の潜在クラスにみる性別構成やクラス所属と諸要因との関連性からは、性別分業体制を前提とした夫方優位から、性別分業体制を前提とした妻方優位への移行が示唆されているように解釈される。

キーワード：老親介護、世代間関係、父系制、双系制、性別分業

1. 研究の目的

本稿では NFRJ18 データを用いて、介護役割についての 4 つの意識変数に対する回答パターンがどのように類型化できるのかを潜在クラス分析を用いて検討し、その結果をもとに夫方・妻方親双方への介護支援について人々はどのような枠組みから捉えているのか、その枠組みにはどのような類型があるのかを把握する。さらに、類型化された回答パターンがどのような属性と関連しているのかという観点から、それぞれの回答パターンの性質について検討していきたい。

親族研究では、経済的・非経済的支援が子から親へ、親から子へ提供される際に、妻方と夫方間でどのようなバランスがとられているのか検討されてきた。夫方親への支援が妻方親への支援とどう関連しあっているのかということは、家族制度の変容や親族原理のありようを示すメルクマールのひとつとして捉えられてきた。

NFRJ08 を用いて有配偶男女の世代間の経済的・非経済的支援実態の分析を行った研究(大和 2017)では、男性は「個人化」傾向、女性は「個人化」と親族関係維持役割をともに果たす傾向がみられるとの指摘がなされている。具体的には、「回答者が女性なら「妻方

多い」が多く、男性なら「夫方多い」が多いという「夫婦の個人化」の傾向がみられ、特に世話の面でこの傾向がはっきりみられた。これに加えて（中略）女性は、夫方・妻方の両方の親に同じように援助する「両方同じ」が男性より多い、これは女性が、両方の親に対して「親族関係維持役割」を担っていることを示す」（大和 2017: 68）との指摘がなされている。

一方同じく NFRJ08 を用いて有配偶女性の世代間の経済的・非経済的支援実態の分析を行った施らの報告では、妻方と夫方への支援について「対称化というよりは多様化の傾向が示された」と述べられており、「結局、伝統的な規範的拘束から比較的自由的な状態が実現し、日常的な親子相互のニーズや距離的な近接などの個別的な事情の中で、子から親への経済的・非経済的援助がなされていると結論づけられるようだ」（施ら 2016: 255-256）と述べられている。

本稿では、これまでの成人子から親への支援実態に関する先行研究の知見をふまえつつ、実態ではなく意識において、具体的には親への介護支援に対する態度において、父系的な規範の残存や双系的な規範の成立といったことが一部、あるいは全体において確認できるのか否かを探っていきたい。家族の変容を確認する際には、実態においては変容しているようにみえても、理念の上では変容していないことも、その逆もありうる（森岡 1993）。NFRJ と同じく全国データ JGSS を用いた実証研究における「人々は自分の持つ扶養規範意識と相容れない場合でも、親に対して父系的な世代間援助を行う傾向が観察された」（岩井・保田 2002: 44）という指摘などがそうした意識と実態のずれを示唆する結果といえるだろう。

そして本稿では、自分の父母と配偶者の父母への介護支援についての態度がどのように関連しあっているのかを検討するにあたって、人々の回答パターンの類型を把握することからはじめたい。先行研究では、支援関係の偏りを実証的に検証するにあたって、妻方親と夫方親との支援関係の規定要因を個別に分析したうえで比較検討を行う形や（三谷ら 1985; 西岡 2000; 白波瀬 2005）、夫方親と妻方親の間の支援の差（岩井・保田 2002; 大和 2017）や支援の有無の組み合わせを変数化して分析に用いる形（施ら 2016 など）が取られてきた。

これに対して本稿では、分析者が前もって妻方・夫方支援の組み合わせを指標化するのではなく、回答者の回答パターンからどのような組み合わせのタイプがありえるのかをまず把握することからはじめる。いわば、特定の一貫した規範やイデオロギーの強弱といった一次元的把握を前提とせず、回答者の回答パターンからどのようなタイプの親子関係・世代間関係像が存在しているのかを帰納的に探っていきたい。規範という形で明確に意識的な形で成立していないとしても、回答者がどのような認知枠組みに基づいてそれぞれの項目に回答しているのかを探ることにつながるだろう。

ただ回答パターンを探るといっても、自分の父母と配偶者父母それぞれに対する意識の 4 変数それぞれが 4 つの回答選択肢で構成されており、単純計算で 256 通りのパターンがありえる。とても検討しきれない数であり、情報の縮約が必要となる。そこで本稿では潜在ク

ラス分析によって、4つの変数における回答パターンの把握を行う。潜在クラス分析（あるいは潜在クラスモデル）は、「カテゴリカルな観測変数の背後にカテゴリカル潜在変数があることを仮定して潜在構造を読み解くモデル」（三輪 2009: 345）や「複数の質的な顕在変数への応答パターンの連関構造を質的な潜在変数として表現された「潜在クラス」という形で類型化して情報を縮約する手法」（稲垣・前田 2015）と説明される。

本稿のデータ分析にあてはめて説明すると、自分の父母および配偶者の父母への介護役割意識（顕在・観測変数としての4変数）の回答への連関構造（回答パターン）の背景にどのような潜在構造が見出せるのかを複数の潜在クラスという形によって情報を縮約して把握することができる。人々の回答パターンの類型を潜在クラスとして把握することで、回答パターンにどのような類型があるのか、それぞれの類型がどのような性質のものであるのかを検討することが可能となる。

また、NFRJ18の介護役割意識項目の回答選択肢は、連続変量として扱うことや、順序性を前提とすることには留保が必要であると考えられる。この点からも「カテゴリカルな観測変数の背後にカテゴリカル潜在変数があることを仮定して潜在構造を読み解くモデル」（三輪 2009: 345）である潜在クラス分析がデータの分析手法として適していると考えられる。

ちなみに該当する質問項目は、次のような文言になっている。「この方に日常生活の介護が必要になった場合、あなたご自身が身の回りの介護をすることになると思いますか」という質問に対して、「1.自分が主に介護をすると思う」「2.主ではないが介護を手伝うと思う」「3.自分以外の家族で介護をすると思う」「4.施設等にまかせると思う」の4択で回答する形式となっている。なおNFRJ18では同じワーディングによって、自分の父と母、配偶者の父と母（若年・壮年層対象）、自分の配偶者、さらに自分のきょうだい（壮年・高年層対象）のそれぞれに対する態度を把握している。

それらの介護役割意識項目の選択肢は、自分自身が介護に関与する度合いが強い順から並べられたものと考えられるが、回答者がそのような順序性を認識して回答したかは定かではない。厳密に言えば「主にはではないが介護を手伝う」という選択と「自分以外の家族で介護をする」という選択は両立可能である。また、「手伝う」相手は、家族なのかそれとも外部サービスなのかは不明であるため、選択肢の並びが介護の社会化の程度を意味するものかといったことも解釈が難しい。当該項目では、回答者が介護にどの程度関わるかに加えて、施設か在宅かの選択や、家族・親族間での役割分担を総合的に把握しようとしているが、一方で選択肢の単純な順序性を前提とすることは難しくなっており、カテゴリカルな質的変数として扱うことが適当であると考えられる。

2. データと変数、分析手順

2.1 データ

分析に用いるデータはNFRJ18である。本稿の分析対象者は有配偶で自分の親と配偶者の

親がそれぞれ1人でも健在である28～62歳の男女である。NFRJ18は28歳～72歳までの男女を対象とした調査を行っているが、本稿で扱う介護役割意識に相当する項目のうち、配偶者の父母の介護に関する質問は63歳以降の高年層対象の調査項目には含まれていないため、62歳までの若年層・壮年層のみを分析対象とする。

2.2 変数

自分の父母および配偶者の父母への介護役割意識は、先述のように「この方に日常生活の介護が必要になった場合、あなたご自身が身の回りの介護をすることになると思いますか」という質問に対する、「1.自分が主に介護をすると思う」「2.主ではないが介護を手伝うと思う」「3.自分以外の家族で介護をすると思う」「4.施設等にまかせると思う」の4件法によって把握されている。なお、当該の質問文では、「あなたご自身」に下線強調がされており、自分自身が身の回りの介護をすることを「介護」として明示している。これは、例えば自分の親の介護をするのは実際には妻であっても「自分」が親の介護をしていると回答するようなことがないように配慮がなされたものと考えられる。

2.3 分析手順・方法

本稿の分析では、まず父母と配偶者父母への介護役割意識（4項目）の潜在クラス分析を行い、親に対する介護役割意識の回答パターンを潜在クラスとして把握する。析出された潜在クラスの解釈を行ったうえで、クラス所属と性別、親同居などとの関連について基礎的分析を行う。

3. 分析

3.1 潜在クラス分析

まずクラス数を選択するために、モデルの適合度を示す複数の指標の値を確認しながら、クラス数を増やしつつ推定を繰り返した。その結果、AICとBIC、ABICはクラス数を増やすほど改善していく傾向が確認された（表1）。なお表1に記載していないが、Bootstrap法によるG2の検定（BLRT法）でも同様に、クラス数を10クラス以上に増やしていても有意差が確認されつづけるという結果が示された。しかしクラス数を一定以上に増やすことは内容の簡潔性に問題が生じ、そもそも回答パターンの情報を縮約するという潜在クラス分析の主旨に反する。そのためBLRT法と同じく、クラス数の増加による尤度比の変化に関する検定であるVLMR法の検定結果を参照した。結果、VLMRではクラス数4までが有意な差があると示し、また内容の妥当性も含めて総合的に判断して4クラスモデルを採用した。

表1 モデルの適合度検定結果

クラス	AIC	BIC	ABIC	VLMR p -value	Entropy
2	10629.767	10763.466	10684.047	<.000	0.831
3	10164.427	10367.649	10246.931	<.000	0.813
4	9789.798	10062.543	9900.528	<.05	0.821
5	9503.369	9845.637	9642.324	ns	0.838
6	9277.438	9689.229	9444.618	ns	0.832
7	9092.19	9573.505	9287.596	ns	0.835

析出された4つのクラスについて、それぞれのクラスがどのような性質を持つものかについて解釈を行う。表2では、潜在クラス分析の結果示された4つのクラスが4つの顕在変数（自分の父母と配偶者父母への介護役割意識項目）それぞれに対してどのような応答パターンを示しているかを提示している。

表2 4クラスモデルにおける各潜在クラスの構成割合と応答確率

		実親優位主介護者型	手伝い中心型	施設介護型	義親は自分以外の家族で介護型
クラス構成割合		0.28	0.30	0.18	0.23
実父	自分が主に介護をと思う	0.509	0.000	0.065	0.157
	主にはないが介護を手伝うと思う	0.000	0.984	0.227	0.412
	自分以外の家族で介護をと思う	0.366	0.000	0.147	0.294
	施設等にまかせると思う	0.125	0.016	0.561	0.137
実母	自分が主に介護をと思う	0.506	0.006	0.077	0.200
	主にはないが介護を手伝うと思う	0.035	0.915	0.254	0.382
	自分以外の家族で介護をと思う	0.332	0.000	0.093	0.272
	施設等にまかせると思う	0.126	0.025	0.576	0.147
義父	自分が主に介護をと思う	0.171	0.133	0.006	0.005
	主にはないが介護を手伝うと思う	0.759	0.785	0.000	0.000
	自分以外の家族で介護をと思う	0.026	0.065	0.001	0.958
	施設等にまかせると思う	0.700	0.018	0.984	0.037
義母	自分が主に介護をと思う	0.222	0.173	0.037	0.004
	主にはないが介護を手伝うと思う	0.700	0.827	0.050	0.000
	自分以外の家族で介護をと思う	0.023	0.000	0.027	0.957
	施設等にまかせると思う	0.055	0.000	0.886	0.040

※クラスの解釈に際して注目した部分の数値を太字で表示している。

まずクラス1の応答確率をみると、とくに自分の父母（実父母）の場合に「自分が主に介護（をすると思う）」が5割と最も多い。配偶者父母に対しても「主ではないが介護を手伝う」が7割となっていることから、自身が介護に関与することに積極的な態度を示しているクラスと考えられる。なお配偶者の親に対しても「自分が主に介護」と回答する割合は、他のクラスに比べると相対的に高い割合を占めている。親や配偶者の親に対して自分が主な介護者としてかかわるという意識が相対的に高いこと、そしてとくに実親に対しては半数程度が自分が主に介護すると回答していることがこのクラスの特徴といえるだろう。こうしたことから、クラス1を「実親優位主介護者型」と名づける。

つぎにクラス2についてみてみると、実父母に対して「主ではないが介護を手伝う（と思う）」が9割となっている。一方配偶者父母の場合も同様に「主ではないが介護を手伝う」が8割前後を占めている。そのため、クラス2はどの親に対しても「手伝い」としてのかかわりを想定する傾向が強いという点から、「手伝い中心型」と名付ける。

クラス3についてみてみると、「施設等に任せる（と思う）」という回答が自分の父母に対しては5割台、義父では9割強、義母では8割強となっている。よって、クラス3はどの親にたいしても施設にまかせる形を想定する傾向が強いということから「施設介護型」と名付ける。

最後にクラス4については、義父母の場合には「自分以外の家族で介護（をすると思う）」が95%以上となっている。一方実父母の場合には、「主ではないが介護を手伝う」が4割前後、「自分以外の家族で介護」3割弱、「自分が主に介護」2割程度、「施設に任せる」が1割程度と全体平均の分布に近く、クラス4に特徴的な分布傾向は読み取りにくい。配偶者の親の介護は自分が直接には関わらないだろうということのみによって特徴づけられるクラスといえる。よってクラス4は「義親は自分以外の家族で介護型」と名付ける。

3.2 クラス所属と属性との関連

潜在クラス分析によって析出された4つのクラスの構成比を男女別にみると（表3）、性別によってクラスの構成比に違いがみられた。男性は「義親は自分以外の家族で介護型」が4割と最も高い割合を占めているが、女性の場合は「手伝い中心型」と「実親優位主介護者型」がそれぞれ3割程度となっている。とくに男女の違いがうかがえるのは、「義親は自分以外の家族で介護型」と「実親優位主介護者型」である。クラス所属に関連する要因として、性別は確かな影響を示しているといえる。また、根強い性別分業の実状や父系制の伝統を鑑みると、回答者である子の性別によって親の介護に対する態度に影響を及ぼす要因やそのメカニズムは異なることが予想される。よって、以降の分析においてクラス所属と諸要因との関連を検討する際には、男女別に分析を行うこととする。

具体的には、親同居、女性の就労とクラス所属との関連について男女別に結果を提示していく。これ以外にも、きょうだい構成（男きょうだい、女きょうだいの有無、配偶者の男きょうだい、女きょうだいの有無）や性別分業規範意識などとの関連についても基礎的分析を

行ったが、単純相関では有意な関連はみられなかった。

表3 性別にみたクラスの構成割合

	n	実親優位 主介護者型	手伝い中心型	施設介護型	義親は自分以外の 家族が介護型
男性	699	18.7	24.5	15.2	41.6
女性	854	28.1	30.2	18.1	23.5
計	1553	24.0	27.6	16.8	31.7

自分の親と配偶者の親それぞれとの同居は、クラス所属とどのように関連するのかを男女別に分析した結果、自分の親、配偶者の親ともに、親同居がクラス所属と関連するのは女性のみであった。

表4では女性の結果のみを示しているが、自分の親と同居している場合には別居している場合に比べて「実親優位主介護者型」が多く、「手伝い中心型」が少ない傾向がみられる。そして配偶者（夫）の親と同居している場合には、「実親優位主介護者型」や「手伝い中心型」が多く、「義親は自分以外の家族で介護型」が少なくなる傾向がみられる。

表4 クラス所属と親同居（女性）

	n	実親優位主介護者型	手伝い中心型	施設介護型	義親は自分以外の 家族で介護型
親と同居	28	44.4%	7.9%	17.5%	30.2%
親と別居	211	26.8%	32.1%	18.1%	23.0%
計	851	28.1%	30.3%	18.1%	23.5%

クラス所属と女性の就労状況との関連については、男性では配偶者（妻）の従業上地位との関連が確認されたが、女性の場合は本人の就労状況とクラス所属との関連は確認されなかった。つまり、女性は自分の就労状況と老親介護についての態度を関連づけて認識していないのに対して、男性は妻の就労状況と老親介護についての態度を関連したものとして認識していることが伺える。

表5では男性のみの結果を示しているが、男性の場合、妻が無職の場合と臨時・派遣雇用の場合とで異なる傾向がみられる。妻が無職の場合には「施設介護型」が多くなるが、臨時・派遣雇用の場合にはむしろ「施設介護型」は相対的に少なく、「義親は自分以外の家族で介護型」の割合が多くなっている。女性がケアを担う性別分業が背景にあるとすれば、妻が無職の場合には「施設介護型」にはなりにくいのではないかと想定していたが、逆の効果が確認された。これはあくまで解釈にすぎないが、妻が無職という状況には多様な事情（本人の健康状態や子の養育など）が含まれているため、想定したような結果が得られなかったので

はないかと考えられる。むしろ調査時点において妻が臨時雇用の場合には、いわば調整弁としやすく、いざとなれば介護要員として期待できる対象として認識されやすいのではないかと考えられる。

表 5 クラス所属と妻の就労状況（男性）

	n	実親優位主介護者型	手伝い中心型	施設介護型	義親は自分以外の家族で介護型
役員常勤雇用	192	17.2%	29.2%	13.5%	40.1%
臨時・派遣	289	19.0%	21.5%	12.1%	47.4%
自営・家族従業	32	18.8%	34.4%	12.5%	34.4%
無職	179	20.1%	23.5%	22.3%	34.1%
計	692	18.8%	24.7%	15.2%	41.3%

4. 考察

4.1 介護役割意識の潜在構造にみる：親への支援における偏り

本稿では意識の上で、子世代が自分の親と配偶者の親への支援をどのように関連づけて認識しているのかを、潜在クラス分析によって探った。その結果、双方の親への介護支援に関する意識は、4つの潜在クラスに分けられた。すなわち、回答の組み合わせには4パターンあり、それぞれ異なる特徴を示していた。4つのうちの2つでは、親の続柄による質的な傾向の違いはみられず、「手伝い中心型」では、自分の父母にも配偶者の父母にも「主ではないが介護を手伝う」形で関与するという傾向を示していた。「施設介護型」も同様であり、いわばこれら2つはそれぞれ積極的、消極的な形での双系制を示すものといえるのかもしれない。

さらに、「実親優位主介護者型」も、実親に対する方が「自分が主に介護」と回答する割合が格段に高く5割を占めているものの、そのかわりに義親に対する介護には消極的な態度をとるという綱引き傾向がみられるわけではない。実親に対する場合に比べると低い割合ではあるが、それでも他のクラスと比べると義親に対して「自分が主に介護」という回答割合は高く、また実親を看るから義親は他の家族にというわけではなく、「主ではないが介護を手伝う」という回答が7割を占めていた。いわばどちらの親の介護にも関与すると考えていると解釈しうる。なお、「実親優位主介護者型」は女性の方が構成比が高く、女性が親族関係維持役割を介護の局面においても担おうとしていることが伺える。

そして「義親は自分以外の家族で介護型」は、自分の親を優先させるものであるような印象も受けるが、当該クラスの応答確率をみると、たしかに自分の親に対して「主に自分が介護」や「主ではないが介護を手伝う」という割合が相対的に高くなっているものの、同時に「施設に介護をまかせる」という割合も配偶者の親に対する場合よりも高くなっている。そのため単純に実親優位とも判断しがたい。

とはいえ、配偶者の親の身の回りの介護については自分が関わりあう事ではないという回答に特徴づけられるクラスには明らかに男性の方が多く所属しているという結果は、夫方優位を示唆するものと考えられる。もしも女性においても当該クラスへの所属が同程度に多いものであったら、夫は夫方親の介護、妻は妻方親の介護をとという「夫婦の個人化」(大和 2017) 傾向を示唆する結果と解釈することも可能であろう。しかし、今回の結果は明確な性差を示していた。

すなわち、4 つの潜在クラスは、自分の親の介護を優先させるタイプ(「実親優位主介護者型」「義親は自分以外の家族で介護型」と、どちらの親に対しても同じような(「手伝い中心」「施設介護」) 対応をとるという2つのタイプに分けられる。すなわち、全体的にみれば、自分の親優先の傾向にあり、もし男女差がなければ双系制を示唆する傾向とも考えられる。

ただし、潜在クラスの構成における性差を含めてまとめると、①介護に対する積極的な姿勢がうかがえる「実親優位主介護者型」は女性に多く、②「義親は自分以外の家族で介護型」は男性に多く、③どちらの親にも同じように関わろうとする「手伝い中心型」は女性に多いという結の3つに分けられる。①は妻方優位の傾向、②は夫方優位の傾向、そして③からは女性主導の双系的な傾向が導き出される。こうした結果は、有配偶男女の親への支援実態について、男性は自分の親のみに対応する「個人化」傾向、女性は自分の親に支援するとともに配偶者の親にも同じように支援するという「個人化と親族関係維持役割」の双方を併せ持つ(大和 2017) と指摘されているが、そのような傾向は介護役割意識においても同様にみられるようである。さらにいうならば、「義親は自分以外の家族で介護型」が積極的な実親優先志向とは言い難いことや、介護者に占める女性比率の高さを考慮すると、今回の意識が実態に反映されていくなれば、妻方優位の双系的な介護支援が促されていく可能性が想定される。

4.2 介護役割意識と性別分業

本稿の分析結果からは、介護役割意識と性別分業についてどのような関連性が指摘できるだろうか。

まず先述のように「実親優位主介護者型」や「手伝い中心型」という、介護に関与しようとする態度がみられるクラスでは女性の割合が高くなっており、「義親は自分以外の家族で介護」という配偶者の親の介護には関与しないということで特徴づけられるクラスでは男性比率が高い。こうした傾向は現在の日本社会の性別分業体制が反映したものといえるだろう。ただし、分析結果は割愛しているが、クラス所属は男女それぞれの性別分業規範意識とは関連していない。当人がケアは女性の役割だからと介護を担おうとしているわけではなくても、男性の参加が相対的に少なければ介護における性別分業は維持されるという構造的なメカニズムを読み取ることができる。

そして、クラス所属と親同居や女性の就労との関連性においても、男女の非対称性が確認

された。クラス所属と親同居との関連がみられたのは女性のみであった（表 4）。男性の場合はクラス所属と親同居との関連がみられない一方で妻の就労状態との関連が確認された。こうした一連の結果は、身の回りの介護を実際に行うのは、どの親に対する場合であれ女性の役割、という認識の反映ではないかと考えられる。

男性の介護意識においても夫婦間介護に対する場合では、性別分業意識との関連が薄い「新しい家族介護志向」（直井 2012）と呼びうるものがあると指摘されているが、老親介護については、根強い性別分業体制があるといえる。

介護役割意識の潜在クラスにみる性別構成やクラス所属と諸要因との関連性からは、性別分業体制を前提とした夫方優位から、性別分業体制を前提とした妻方優位への移行が示唆されているように思われる。ただし、こうした解釈をあとづけ、結論を述べるにあたっては多くの課題も抱えている。

4.3 課題：「自分以外の家族」とは？ 誰を「手伝う」のか？

本稿の分析では、クラス所属の要因についてはごく基礎的な分析結果を提示している。より詳細な分析を進めることで、それぞれのクラスの特徴を詳しく把握し、介護をめぐる世代間関係の現状について考察を深めていくことができると考える。

ただし、本稿で分析に用いた変数自体が、解釈しがたい要素も持っている。そのひとつめとして、「自分以外の家族」とは具体的にどういう人を指すのか不明であるという「家族」定義の曖昧さが挙げられる。考えられる対象としては、両親が健在の場合には一方の親、自分の配偶者や子、あるいは他のきょうだいやそのきょうだいの配偶者や子などが想定できるだろう。すなわち、ここでの「自分以外の家族」が自分にとっての生殖家族のメンバーなのか、それとも自分や配偶者の定位家族なのかは不明である。想像としては、男性の場合に、「自分以外の家族」に配偶者である妻が含まれる割合も少なくないと考えられる。「自分以外の家族」が妻を指すのか、それとも別世帯のきょうだいを指すのかでは想定されている介護イメージはかなり異なるものになるといえる。今回男性で最も多い割合を占めたのがこの「義親は自分以外の家族で介護型」であったが、この回答には異なる複数の想定が含まれている可能性がある。先述のように自分の世帯内の妻や子といった自分以外の世帯内メンバーにまかせるという想定と、きょうだいやきょうだい世帯に任せるという想定の方が含まれている可能性がある。「自分以外の家族」が他世帯を構成する親族なのか、それとも同一世帯のメンバーなのかを分けて把握することができれば、とくに男性の回答パターンは今回の分析結果とは異なる傾向を示す可能性が考えられる。

また、先にも述べたが、「主ではないが介護を手伝う」という場合の手伝う対象が「家族」なのか、それとも外部サービスなどの家族外の専門家なのかは区別されていない。このことは、「手伝い中心型」の解釈を難しくさせている。高齢者介護の実態においては、主介護者と副介護者の組み合わせにおいて、家族外の専門家が含まれることは少なくない（田中 2013）。手伝う相手が「家族」なのか、それとも家族外の専門家なのかによって、「手伝い中

心型」の介護のありようやその位置づけは大きく異なると考えられるが、回答者が回答に際してどのような想定のもとに回答したかを判断することは難しい。きょうだい間のサポート関係や介護分担の偏りなどを把握するためにも両者は区別される必要があるだろう。

今回析出された4つのクラスの中でも、とくに「義親は自分以外の家族にまかせる」と「手伝い中心型」の2つのクラスについては、「家族」という言葉の持つ多義性、そして家族介護と介護の社会化が分節化されていないため、当該クラスの詳細な解釈には困難が生じやすいといえる。

そして最後に、最も大きな課題といえるが、本稿で介護役割意識としてとりあげた意識が、実際には人々のどのような意識を反映したものであるのかについては慎重に判断する必要があると考える。子世代の高齢者介護に対する意識が、理想と予定とでは隔たりがあることや、理想としての回答と実現可能な予定としての回答とのずれは男女で異なる傾向をみせることなどが指摘されている(中西 2021)。本稿において介護役割意識として把握されたものが、社会的望ましさを反映した理想的、希望的観測に基づく回答なのか、それとも理想とは異なるがそれしかないという消極的な回答なのかによって、得られた結果をどのように位置づけるべきかは大きく異なるだろう。今回の介護役割意識は、「あなたご自身が身の回りの介護をすることになると思いますか」という質問への回答であることから、理想というよりは予定を回答している可能性が高いと考えられるが、例えば主介護者としての介護を予定していると回答した人々が、それを積極的に望んで回答しているのか等について配慮した検討が重要な課題である。人々のニーズとして把握する際に伴う大きなリスクに留意する必要がある。

今回の分析をとおして介護役割意識を端的に把握することの難しさを改めて認識することができた。それはまた、高齢者介護をどのように把握することが妥当かについて、まだ十分な共通認識が得られていないことを示しているともいえるだろう。こうした課題を把握することが可能であったのは、老親介護についての態度を夫方・妻方双方の父母別に把握しうる調査項目が、全国家族調査にもりこまれていたからに他ならない。

今回得られた結果が、他の調査データを用いた分析結果や介護実態の傾向とどの程度一致するのか、あるいは一致しないのかを検討しながら、高齢者介護に対する人々の不安や希望を明らかにしていくことが必要であろう。それは、世代間関係や高齢者介護が抱えている課題を明らかにすることでもあり、介護の当事者だけにかぎらず社会全体で対応を構想に資する資料となるよう検討を重ねていきたい。

【備考】

NFRJ18 の調査概要の詳細については、第一次報告書を参照されたい。

(<https://nfrj.org/nfrj18publishing.htm>)

[文献]

- 稲垣佑典・前田忠彦,2015,「潜在クラス分析による「日本人の国民性調査」における信頼の意味とその時代的変遷の検討」『統計数理』63(2):277-297.
- 岩井紀子・保田時男,2008,「世代間援助における夫側と妻側のバランスについての分析——世代間関係の双系化論に対する実証的アプローチ」『家族社会学研究』20(2):34-47.
- 三谷鉄夫・盛山和夫,1985,「都市家族の世代間関係における非対称性の問題」『社会学評論』36(3):335-349.
- 三輪哲,2009,「計量社会学ワンステップ講座(3) 潜在クラスモデル入門」『理論と方法』24(2):345-456.
- 直井道子,2012,「男性のジェンダー意識と介護意識」目黒依子・矢澤澄子・岡本英雄編『揺らぐ男性のジェンダー意識——仕事・家族・介護』新曜社,114-133.
- 中西泰子,2021,「壮年世代の老親介護意識にみる世代間関係と性別分業」小池誠・施利平編『家族研究の最前線 5 家族のなかの世代間関係——子育て・教育・介護・相続』日本経済評論社,125-150.
- 西岡八郎,2000,「日本における成人子と親との関係——成人子と老親の居住関係を中心に」『人口問題研究』56(3):34-55.
- 森岡清美,1993,『現代家族変動論』ミネルヴァ書房.
- 白波瀬佐和子,2005,『少子高齢社会のみえない格差——ジェンダー・世代・階層のゆくえ』東京大学出版会.
- 施利平・金貞任・稲葉昭英・保田時男,2016,「親への援助パターンとその変化」稲葉昭英・保田時男・田淵六郎・田中重人編『日本の家族 1999-2009』東京大学出版会,259-274.
- 田中慶子,2013,「きょうだい地位と実親の介護」『家計経済研究』98,25-34.
- 大和礼子,1997,「親・義親との援助関係における“夫婦の個人化”？——第3回全国家族調査(NFRJ08)の分析から」『人口問題研究』73(1):58-77.

**An investigation of patterns of questionnaire responses about
attitudes toward care for aged parents
: Using Latent Class Analysis**

**Yasuko Nakanishi
Sagami women's University**

The purpose of this paper is to reveal the latent patterns of attitudes toward elderly parents' care. To accomplish this aim, I investigate the response patterns of four variables which ask the attitudes toward care for aged parents and parents-in-laws with four choices by latent class analysis. I extract four latent classes from the data mentioned above depending on the VLMR test. After describing the attitudinal composition of the latent classes, I explore the images of intergenerational relationships from response patterns as the combinations of the respective variables inductively. The result of analysis implies changing intergenerational relationships from the precedence for husband's parents to the preference for the wife's parents. However, both intergenerational relationships are still based on the sexual division of labor.

Keywords: Care for elderly parents, intergenerational relationship, patrilineal, bilateral descent, Sexual Division of Labor